

日本銀行誕生秘話

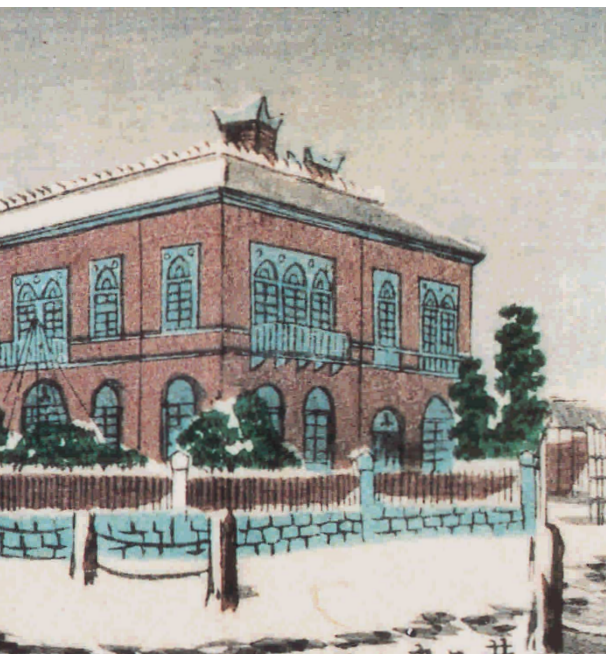
「中央銀行ナル者ハ一國金融ノ心臓ナリ」

日本銀行は明治十五年十月十日、隅田川の永代橋のたもと、日本橋箱崎町で開業した。明治維新以降、新政府による不換紙幣の乱発で大インフレが発生し社会不安が広がっていた。そこで、通貨の安定と財政の健全化を図るために、ヨーロッパ先進国の中央銀行制度にならい、わが国の中央銀行として日本銀行が設立されたのである。

ところが実は、中央銀行とはいえ、肝心の発券（銀行券の発行）に関しては、明治十八年五月に最初の兌換銀行券を発行するまでの約二年半、「銀行券を発行しない中央銀行」という世界でも珍しい姿を示していた。そこに秘められた真相とは。

取材・文 清木たくや

錦絵「永代橋際日本銀行の雪」井上安治画（貨幣博物館所蔵）。日本銀行は、当時の永代橋（現在より100メートルほど上流に位置）のたもとにあった北海道開拓使（明治2年7月設置～明治15年2月廃止）物産売捌所の建物を本店として利用した。明治29年に、江戸時代に「金座」があった現在の日本橋本石町へ移転するまでの14年間、ここで営業を続けた。



日本銀行の歴史は古い。そんなことは言われなくてもわかっている。誰もがそう思うに違いない。では、わが国の明治時代の憲法や国会よりも歴史が古いと聞かされたらどうだろう。たい

ていの人々が、念のために歴史年表で真偽のほどを確かめたくなるのではなからうか。

そこで、史実を少し並べてみると、日本銀行開業の七年後の明治

日本銀行のあゆみ

1868年（明治元年）	明治政府、「太政官札」発行
1871年（明治4年）	新貨条例公布（円制定、金銀貨発行）
1872年（明治5年）	国立銀行条例公布
1877年（明治10年）	西南戦争
1881年（明治14年）	松方正義、大蔵卿に就任
1882年（明治15年）	日本銀行条例公布、日本銀行開業（永代橋）
1885年（明治18年）	日本銀行券（兌換銀券）の発行開始 銀本位制度確立へ
1896年（明治29年）	日本銀行本店、現在の日本橋本石町へ新築移転
1897年（明治30年）	貨幣法公布（金本位制度確立）
1927年（昭和2年）	金融恐慌発生
1931年（昭和6年）	金輸出再禁止、銀行券の金兌換停止 管理通貨制度へ
1941年（昭和16年）	太平洋戦争勃発
1942年（昭和17年）	日本銀行法施行
1946年（昭和21年）	新円切り替え（旧円券を回収し、新円券に切り替え）
1998年（平成10年）	日本銀行法改正

二十二年二月十一日、大日本帝国憲法（明治憲法）発布。その翌年の七月一日に第一回衆議院総選挙、十一月二十九日に第一回帝国議会（第一議会）開会。

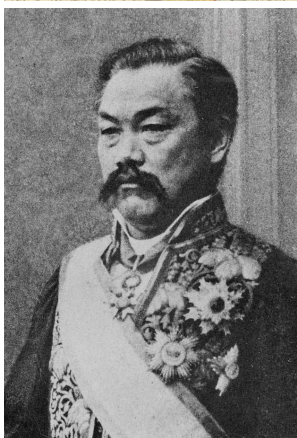
しかも面白いことに、憲法の制定も国会の開設も、日銀の創立と極めて深い関係がある。切っ掛けはすべて、一つの政治的事件にあったからだ。憲法制定、国会開設、開拓使官有物払い下げなどの問題

で、政府部内を分裂させた「明治十四年の政変」である。

この政変で、薩摩出身の松方正義が大蔵卿（現在の財務大臣）に就任し、歴史の表舞台に登場する。緊縮財政で有名な、いわゆる「松方財政」の始まりである。そしてこの松方のもとで、兌換銀行券の一元発行や近代的な貨幣制度・金融制度の確立を目指して、中央銀行設立に向けた動きが本格化する

*（注）……文中の敬称は省略しました。また、役職名などはすべて当時のものです。

1882年（明治15年）開業当時の日本銀行付近の地図（貨幣博物館所蔵）



当時の永代橋。左手遠方に日銀の建物が小さく見える（上）ジョサイア・コンドル（工部大学校教師）設計の2階建てレンガ造りの建物。敷地が隅田川沿いにあることから、水の都ベニスにちなんでベネチアン・ゴシック様式が採用されている（右）。松方正義（左）（写真はいずれも金融研究所保管資料）



わけである。

背景には、とても「経世済民」とは言いがたいわが国の経済情勢があつた。明治維新以降、政府は富国強兵と殖産興業という国民的課題を旗印に掲げ、欧米先進国と肩を並べる近代国家の建設に向けて邁進した。新貨条例や国立銀行（ナショナル・バンク）の詔語で、あくまで民間の銀行）条例などを制定して、貨幣制度の近代化にも努めた。しかし、いかんせん財政基盤が脆弱すぎた。

追い討ちをかけるように、明治十年には西南戦争が勃発。政府は巨額の戦費を大量の不換紙幣の増発で賄わざるを得なかった。その結果、膨大な紙幣が流通し、紙幣価値は大幅に下落し、紙幣に対する信用が大きく揺らいだ。

こうした中、就任したばかりの松方は、「誠ニ紙幣整理八国家ノ財政経済ニ於テ焦眉ノ急務タリ」（「進講財務経営之一班」という確固不拔の信念で、まず不換紙幣の整理に乗り出したのである。

中 中央銀行の必要を論じていたのは、もちろん松方一人ではない。だが、中央銀行設立に寄

せる思いには並々ならぬものがあり、大蔵卿に就任する直前、中央銀行設立に言及した「財政議」と題する意見書を既に太政大臣の三条実美に提出していた。

さらに、大蔵卿就任のわずか半年後の明治十五年二月には、「日本銀行創立ノ議」と題する建議とその注釈版ともいふべき付属書類「日本銀行創立旨趣ノ説明」を三条大政大臣に提出した。

元日銀理事で一五〇冊以上の著書を残している故・吉野俊彦は、日銀在職中に「やさしい日本銀行史」と銘打って執筆し続けていた浩瀚な自著『日本銀行史』（全五巻、春秋社刊）の第一巻において、「日本銀行創立旨趣ノ説明」の中の一節を引用して、次のように書いている。

「この節は中央銀行が国民経済の運営上必要不可欠な理由を、巧妙な比喩をもって述べているのですが、金融を国民経済の『血液』にたとえ、中央銀行を『心臓』にたとえるのは、随分昔からののだといふことが、この文章を読むことによって確かめられるわけです」

該当部分の原文を少し書き抜い



政府紙幣「明治通宝札」（貨幣博物館所蔵）。明治政府が乱発していた旧紙幣類を回収するために発行した初の洋式印刷の紙幣。当時の日本は西洋式色刷り紙幣の製造については未経験だったので、ドイツの会社に印刷を依頼し、国内で「明治通宝」の文言や官印などを補って完成させ、発行した。



錦絵「欲の戯ちから競」（貨幣博物館所蔵）。明治13年に描かれたこの錦絵は、西南戦争後に紙幣に対する信頼が揺らいでいる当時の様子を「首引き」という遊びになぞらえて描いている。役人の服を着た政府紙幣「明治通宝札」が米俵に引き寄せられており、「首引き」で劣勢に立つ紙幣の様子を、左上の役人服を着た金貨と銅貨がどっしりと構えて眺めている。

吉原重俊初代総裁。任期：明治15年10月6日
～明治20年12月19日（金融研究所保管資料）



てみると 「中央銀行ナル者ハ
一国金融ノ心臓ナリ 若シ此心臓
アルニ非スハ 誰レ力能ク全国
ノ家財ヲ流通シ 能ク聚メ 能ク
散シ 縦横離合 其宜ヲ得セシム
ルヲ得ンヤ」（『日本金融史資料
明治大正編 第四巻 松方正義閣
係文書 大蔵省印刷局発行）
ともあれ、こうして「日本銀行
創立ノ議」の三カ月後の六月二十
七日、中央銀行の設立を定める日
本銀行条例が公布された。「財政
議」の段階では、「日本帝国中央
銀行」といういかめしい名称が付
せられかねない勢いだったが、正
式に「日本銀行」という無難な名
前に落ち着いていた。

株主の募集も順調に進み、「資
本金一千万円の半額五百万円は政
府出資、残り五百万円を全国各地

の民間人から募集するため七月二
十八日新聞広告を出したところ、
わずか二十三日で満額になった
という（前出『日本銀行史』）。

本店開設場所も隅田川の永代橋
のたもとにあるイギリス人建築家
J・コンドルが設計した二階建て
レンガ造りの建物に決まった。前
年に廃止になった北海道開拓使の
物産売捌所の建物で、当時は大蔵
省の管理下で空き家になっていた。
こうして、条例公布から四力月
間という短期間のうちに慌ただし
く開業準備が進められ、明治十五
年十月十日、晴れて開業となった。
五局十三課、人員わずか五五名で
のスタートであった。

初代総裁は、薩摩出身の吉原
重俊。現職の大蔵少輔（現
在の財務次官）からの抜擢であつ
た。欧米の留学経験が豊富なうえ
に、当時としては珍しく和漢洋の
三学に通じ、社会的な評価も高か
った。大蔵少輔として、松方正義
に全面的に協力もしてきた。いわ
ば、そうしたことが評価されて、
総裁就任となったわけである。

「したがって吉原重俊が総裁とし
て不換紙幣整理に協力し、かたが

た日本銀行の発行する兌換銀行券
の流通範囲を拡張することに熱意
を注いだのは当然のことであつ
た」（吉野俊彦著『歴代日本銀行
総裁論』毎日新聞社刊）

ところが、中央銀行にとって本
来いちばん肝心な業務であり、特
権として付与されるのが当然であ
るはずの兌換銀行券（日本銀行券）
の発行は、開業から約二年半後の
明治十八年五月まで待たなければ
ならなかった。なぜなら、当時ま
だ完全にはインフレーションが収
束していなかったため、最初から
兌換銀行券を発行しても、すぐに
正貨と兌換されてしまつて、兌換
銀行券が市場に流通する可能性が
ないのは明らかだったからだ。

「この間の日本銀行は銀行券を発
行しない中央銀行という世界でも
まれな姿を示していたのです。
（中略）日本銀行がこのように極
めて変則的な中央銀行として出発
せざるを得なかったのは、英国や
スウェーデンの中央銀行と異なつ
て、政府の金融制度整備の一環と
して人為的に創設されたからなの
で、もし一つの巨大な発券銀行が
他の発券銀行の発券機能を集中し



最初の日本銀行券（十円券）と本位銀貨。紙幣は図柄に福の神の大黒天が用いられていることから、通称「大黒札」と呼ばれる。日銀は銀貨と各種紙幣（政府紙幣、国立銀行紙幣）間の価値が安定するのを待って、開業から約2年半後の明治18年、写真のような兌換銀行券の発行を開始した（銀本位制度の確立）。額面の下に「銀貨と引き換える」旨の文言があるが、この場合は本位銀貨10枚と同等の価値であることを示している。



「メダマ」マークの由来は明らかではないが、篆書による「日」そのものであり、日銀独自のデザインではない。明治5年に発行された政府紙幣「明治通宝札」で、すでに「大日本政府大蔵省」の「日」の部分に「メダマ」の字体が印刷されており、明治15年の開業時には、正式の行章として採用されていたとみられる。明治18年に発行された最初の日本銀行券にも、総裁印の中央に「メダマ」の行章がデザインされている。明治29年に落成した本店（現本館）の正面玄関には、「メダマ」を2頭のライオンが抱き掲げる青銅製のレリーフが取り付けられた。

つつ自然発生的に中央銀行に進化していったのであるならば、このような事態は生じ得なかったはずでした（前出『日本銀行史』）

それでも、「銀行の銀行」としての業務（公定歩合の決定、金融制度の整備と取引の拡大）や、「政府の銀行」としての業務（国庫・国債事務）を遂行していく日銀に寄せる世間の期待は高かった。

例えば、東京日日新聞は開業日当日の十月十日の二面で、「日本銀行ノ開業」として大きく報道。日銀の業務や経営体制の概説に始まり、総裁・副総裁・理事などの人物評価を経て、記事をこう締めくくった。

「日本銀行ノ為メ国家ノ財政ノ為ニ 総裁理事共ニ其人ヲ得タルヲ賀セザルベケンヤ」

昭和五十七年、日銀は創業百年史（全六巻、資料編一巻）の刊行を開始した。その第一巻に、「日本銀行創立の意義」として、次のような記述がある。

「本行の創立は、明治維新以来早くから開始された政府の近代的通貨・金融制度の移植・育成努力

が、幾多の曲折した道程を経た後によつやくにしてたどりついた最終到達点であった。（中略）創立期の本行がいわゆる官立的・官治的性格を強く帯びていたのはそのためにならぬが、近代経済の本格的発展に先駆けて本行が設立されたゆえんもここにあり」

創立期、日銀の処理すべき事務は急速に膨張し、開業の翌十六年には早くも移転の話が持ち上がるほど手狭になったが、遅れていた金庫の工事もやっと完了し、四月二十八日土曜日、開業から約半年遅れでようやく開業式と夜会を執り行うことができた。席上、松方大蔵卿は、「銀行ニ従事スル者常ニ信用ノ二字ヲ忘却セス 徹頭徹尾信用ヲ以テ基礎ト為シ 漸次着実ニ歩ヲ進メ」などの名文句に満ちた祝辞を述べ、期せずして、以後の歴代総裁に豊富な演説ネタを残すことになった。

二日後の月曜日、東京日日新聞は二面から四面までを使って開業式の特集記事を組み、来賓の祝辞はもとより夜会の様子まで子細に報道して、こう記した。

「吾曹ハ深く 日本銀行諸君ガ

上ハ政府ノ望マルル所ヲ体シ 下ハ世人ノ冀フ所ニ応ジテ 是ヨリ其業ヲ経営アラバ 其必ラズ全国ノ財政ニ向テ 著ク効績ヲ致ス事ヲ疑ハザル也」

それからさらに時が流れ、今からちょうど百年前の明治二十九年三月二十一日、日本橋本石町に現在の本店（現本館）の建物が竣工すると、盛大な落成式を行って移転した。箱崎町のコンドル設計の旧本館はその後も集会所として使用されていたが、大正十二年の開東大震災で、付設の家屋もろとも焼失した。

開業地跡に、創立当時の日銀をしのばせるものは何も残っていない。創業百周年を記念して建てられた瀟洒な石碑（日本銀行創業の地）が、緑豊かな歩道沿いに、静かにたたずんでいるだけである。



昭和57年11月、創業百周年を記念し、開業地（現在の中央区日本橋箱崎町1番地）に記念碑が建てられた。